『注文の多い料理店』序

宮沢賢治

わたしたちは、氷砂糖をほしいくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃（もも）いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗（らしゃ）や、宝石いりのきものに、かわっているのをたびたび見ました。

わたくしは、そういうきれいなたべものやきものをすきです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹（にじ）や月あかりからもらってきたの

です。

ほんとうに、かしわばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたないということを、わたくしはそのとおり書いたまでです。

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでしょうし、ただそれっきりのところもあるでしょうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところ

もあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。
けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。

大正十二年十二月二十日

宮沢賢治

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社
　　１９９０（平成２）年５月25日発行
　　１９９７（平成９）年５月10日17刷
初出：「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社
　　１９２４（大正13）年12月１日
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００５年１月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。